小石を拾つてカン〳〵といふ次第■いやはやお道具の立派なこと、勿驚伸せば六尺にもならうといふ大なる**イーゼル**、それに握り太の傘立、飛行船といはるゝ大洋傘、四ツ切の部厚の畫板重さうな三脚、其上に寫生箱だ、さうして畫いてゐるのは**ワットマン**九ツ切■大さう力があると見えるね■名物辨慶の力餅を食つたおかげだらう■茶話會で振つたのは**ハイカラ**さんに山男だ■片や長い髪を眞中から分けてペラ〳〵と饒舌る、片や**イガグリ**頭に眞黑な顏、手織縞の袴も丈も短かい奴で頗る樸訥だ■××君の三脚を見たかい■初めは三本の**ミガキ**竹、後には細い木の枝さ、何も不思議はない■××君が講習へ出て來たのは非常な苦心で、家人の目を盜んで荷造したので、三脚も革だけ持つて來た、繪具も途中で借りて來た、袴がないので膳所で借りたら損料一日十五錢宛とられたさうな■××君が互別會でやつた近江八景は當意即妙感服仕つたね■『君は大阪へお歸りですか』『ハイ』『別に御病氣にもならなかつたのですか』『ハイ』『ソレなら病まずの歸阪(矢走の歸帆)ですね』まアこんな調子で、最後の石山の終結(秋月)はよかつた■そこで此さゞなみ集も終結としやう(以上丹青子外七氏)

日本水彩畫會新會友

和歌山縣師範學校寄宿舍　鍋島信太郎
京都府龜岡町字河原町　南江　誠一
名古屋市西區玉屋町一ノ三　加藤　信一
群馬縣利根郡古馬牧村後閑　櫛淵雄須賀

寄書

汽車の廿餘時間

森　非折

去る五月中旬、郷里(青森)へ歸る可く上野驛を夜の八時半に出る。奥羽線の列車へと乘つた、(御定まりの三等で……)其れもえゝが、滿員ィ棒立が澤山ある自分も勞れをこらえての棒立、然も當時病氣中であつた、漸く宇都宮で、腰掛占領しる事が出來た、全く地獄で佛に出會したより嬉しかつた(地獄で佛に會つた事はないが……)先ヅ**ガラス**窓を開けて、馬鹿にダルヱ頭を風へ當てゝ居たら……突然……自分の背後から……キタナヱ枯れた**セーピヤ**のよーな聲あり「アンサン孫ア風ひぐから其處(窓)ゞてダンヘ(下サヱ)」と、聲しる方を見たら、六十路餘りの婆さんが目付ゐた(聲の主は此の婆さんであつた)そして其の婆さんの御腹のあたりへ頭を押付けて、スヤ〳〵と夢路たどつてる姿やさしゐ六七才の少女が、婆さんの孫らしゐ(言葉では秋田在の人らしい)拙者は御意かしこまつたと窓をゞた、美しい少女の寢顏はどこまでも無邪氣に見へた、年老へたる孫婆、にいだかれて、無邪氣な年頃の美い少女が夢をむさぼつて居る「無心」なる樣を見て、拙者は……「あー畫的だなー」と思ふたのである三等(其れも滿員と來てる)の情なさは、横に長くなつて寢ると云ふ氣樂は出來なかつたのだ。仕方なしにチャーンと腰掛の上に「ヒザ」折ツて、身體を伸ばした樣は、座禪よろ

しくと云ふ所だ、然し座禪に緣のない拙者には退屈此の上もなかつた、こんな事してる中に、自分の頭は「スケッチ」なる一言を大きく力ある聲で呼はッた、拙者は「オーそれ〳〵此れを忘れてる法はない間抜けめッ」と自責して「イザ此れより「スケッチ」」と云ふので、一生懸命……漸くあつて納ッたものは、曰ク「商人風」曰ク「奇妙な寢顏の爺さん」曰ク「例の秋田の婆さんのエルロオーカ顏」曰ク「婆さんの孫の花のよーな寢顏」曰ク「少年」曰ク「ハイカラ紳士」曰ク何曰何と云ふ譯で、可なりの豐富をスケッチ帖は得たのだ、其れが皆ランプの黃色光りをあびてゐるのであッて、明るさは極端に明るく暗きは極端に暗く明暗の調子が烈しく見ゑて氣持がゐゝ、中にも「奇妙な寢顏の爺さん」は、昨秋文部省展覽會出品、高村先生の「停車場の夜」の「エルロオーカたッぷりの色を思へ出させた、拙者はせめて半人前にでもなれゝば、こんな所を物にしたいと思ふた（なぞと云ふて中々大きく振ッたネ）こんな風な退屈な、ムサ苦しい夜濕車の一夜も、何等苦痛もなく、面白く有益に過ごさせた「スケッチ」なる者の効力も、實際多とせざるま得んのだ。

夜短かな其頃は、こんな事をしてる中に東が白んで來て、何んだか寒くも成ッて來た。「モーブ」に「コバルト」を混じたよーな山の上方に「クロームオレンヂ」の一線が横たわッた、ダン〳〵赤味を加へ、スバラク有ッてまばゆき光の大親玉の丸いー坊さんがヌット出た（フル〳〵と廻ッてるよーに見いて）夜は全く明けて濟ッた、美觀此の上もなし、向ふ側の窓が、幸ひ見取枠の代用になッて、誠に良く見ゑる—然し地平線の上下しる事非常なもの—（地平線が始終うごくもんでないが、見る方の拙者の乘ッた濕車が「ガタ馬車」よろしくと云ふ奴だもの……）今度は自分の窓（我物顏だネー）から外を見た、此れは畫的、山間の溪流でサラ〳〵と流て、小岩に當り、點々たる「白アワ」を吹き立て、目のさめそーな景だ、好活畫圖、景色は一變して廣々たる野原となつた、遠景には曉光に輝いたる淡しき「バーミリオン」の殘雪を頂いて、半腹より上部バカリパット明るく、下部は暗紫色を呈し「コバルト」の淡き霞を持ッて、やわらかに包まれた遠山があつて、中景には、銀色の川をなゝめに青々たる畑が位置良くならんで、近景を助けて居る。誠に廣大な景色。其の他「杉の森」の青々たる、「白いよーな岩山」の壯大たる、「底淸き暗綠色の川」の幽靜たる、皆此れ自分の頭は深かく印象を與へた、此等に見取られた拙者は、たしかに無我の境に立入ッて有ッたのだろ—、濕車は有難いもので—、座りながらにして此等の好風景に接しる事が出來得るではないか……況んや人も通はれんよーな谷間等の佳景を見る事の得らるゝに於てをやだ……（全く赤キップでは申譯ないよーだぜ）拙者は切實に畫道（洋畫）にイサヽカでも心あるのを喜んだ、昨夜の退屈も「スケッチ」で忘れ……、今は又こーゆー有難味（洋畫研究に付いて）を覺へて少しも退屈を覺へないのは全く「ヘボ」でも研究心を持つて居る御蔭に依ッてだと思ふたのである。當時拙者

は、不幸が非常に重ッてあつたのだ（拙者は病の爲め歸國しる所で……鄕里では大火があつて、然も拙者の家は風下七軒目で丸燒け、大切な參考物等も皆火に喰われたのだ）其の不幸も忘れてる事が出來てあつたのだ！他の乘客を見たら、例の秋田婆さんは餘程苦すへと見へて、向ふ「**ハツマキ**」……若へ「**デモ紳士**」風の人は、顏色を靑くして、「**スタエ**」を押へ〳〵してる……、其の脇きの若い美人（奥さん風）はネムソーな目をして「**コバルト**」の呼吸をしてる、拙者の向ふの學生帽の靑年は何やらの雜誌を見ながら（讀んでるのか單に本に目を向けてるのか）ネムタソーな「**アクビ**」幾回も〳〵してあつた、拙者はこんな人の樣を見てこー思ふたのだ。

「今此等の人に、イサヽカでも洋畫趣味を平常持つて居たならば、かゝる塲合見苦すい「**アクビ**」等をせなくとも面白く樂しく乘つて居らるゝものを」……と……、拙者の身の上をも忘れて、此等の人々が氣の毒に見えたのである。

拙者は其れから「スケツチ」もやり、車外の景色も樂しく見た……、やがて小暗らき時に驛夫の聲で下車した、出向いには親父と弟が來てあつた。（完）

飾り氣のない面白い文章であるから、東北地方の言葉遣ひはわざと其儘にして置きました（編者）

『みづゑ』に希望

石川縣小松町　湯淺生

『みずゑ』の發展と內容の向上されたるを喜祝す。

繪畫既に美術なり――水彩畫は繪畫なり――『みづゑ』は水彩畫同好者の絕大指南車なり――此見地よりしてプライスは多少エルヒョーヘンされても僕は原色版、色彩石版のより多からんことを希望す。

僕由來風景畫を殊に愛好し、近くは六拾六號大下先生の「しげ」藤嶋先生の「代官阪」前號の「夏の山村」前々號の石井先生の「鴨川」等最垂涎して喜悅〳〵。

僕矢張六拾六號に『みづゑ』の親友君の御說の如く、大下先生の紅葉せし雜木林、極めて遠き遠山の繪具の遣ひ分け等、或は旅行中得られ給ひしスケツチ原色版を揭出ありて、其描き方の色彩の順序、乃至一種氣骨ある寫生には油繪筆の剛き筆毛が適當、及び其方法など御揭載多からんを贊成、否な御願ひして止まず。

或時は山嶽號、或時は海岸號等の名稱の下に、先生の美敷風光の原色版多き年二回位ひ臨時增刊の御發行は如何尾瀨沼號の如くに。

田舍の村から

松本白也

私は及ばずながらも水彩畫嗜好者でもあり、研究してみたい決